歴史探訪クラブ

其の173

History Inquiry Club

文化財課 ☎27-8604
FAX 22-3811

屋根瓦への憧憬

私は建物に使われる瓦が好きです。そもそも、瓦は特別なもの。中世以前には寺院や役所にしか使われませんし、戦国時代には織田信長がその常識を破り、城にも使うようになります。これまでの瓦は、政治、宗教のシンボルでもあり、瓦職人は権力者に保護さえされていました。屋根に葺かれた瓦が曲線とともに整然と並んでいる様もリズム感にあふれ、実に心地よいのです。唱歌こいのぼりに「いらか（瓦）の波」と歌われ、時代を経て落ち着いた色となった瓦は、日本の原風景といえるのです。

江戸時代、田原には長嶋重（十）左衛門という田原藩の御用瓦師がいました。田原藩の記録では、貞享三年（1687）にその名を見ます。代々襲名であったようです。田原城をはじめ、有力なお寺の瓦を作っていました。現在でも、建替えによって下ろされた鬼瓦に長嶋（十）重左衛門の名前が刻まれている江戸時代の瓦を見ます。右の写真は、共に市内のお寺に残された長嶋重左衛門の鬼瓦の作品です。

屋根の一番高い棟の両端にある鬼瓦は、防水機能や装飾ばかりでなく、お寺を、そして建物を守る魔よけの意味合いもあります。鬼瓦の面に「水」が刻まれている場合は防火の願い、家紋の場合はその建物に住む家系を表すためのもの。大きく目立つ物ゆえ、瓦師の腕の見せどころです。特にお寺は、庶民の心のよりどころであるばかりでなく、村で最も大きな建築物で、瓦が葺かれた雄大な屋根は村の中で羨望のランドマークでもあったでしょう。そこに葺かれる鬼瓦はまさにシンボルだったことでしょう。

渥美半島の伝統的な瓦は水が浸透しないよう、炭素を吸着させた燻し瓦です。かつては、瓦屋さんはそれぞれの村にもあり、村の家に瓦を供給してきましたが、今では家の多様化も進み、さまざまな素材の屋根材、瓦の種類が増え、昔ながらの燻し瓦を葺くことが少なくなりました。

今でも大工さんや建築会社さんが家族の夢をかなえるよう、一生懸命家を作っています。和風・洋風、そして建築家がデザインしたすばらしい家を見るたび、この街の景観がどのようになっていくのか気になるところです。

それでも、昔ながらの瓦に憧れを抱くのは日本人のDNAでしょうか。

（増山）

●長嶋重左衛門の銘

●長嶋重左衛門の鬼瓦
（慶雲寺／嘉永4年）

●長嶋重左衛門の鬼瓦
（西光寺／天保4年）